

第10回 斐伊川水系 生態系ネットワークによる
大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会
議事要旨

あいさつ

事務所長 河川に限らず、その他の周辺地域、例えば、田んぼや山林なども全体としてのネットワークに含まれる。このような認識を持って、取り組みが広がっていくことが重要かと思っている。大型水鳥類が飛来する環境づくりと同時に、地域経済を活性化させていくのも、もう一つの柱である。様々な地域の先例的な取り組みを参考にしつつ、検証を含めてまずは行動を起こすことを念頭に、今後進めていきたいと思う。引き続き、皆さまにはご協力をお願いしたい。

規約の改正（委員の追加、交代）

委員の追加：

守屋 公二 委員（農林水産省 中国四国農政局 島根県拠点 地方参事官）
秀田 智彦 委員（環境省 中国四国地方環境事務所 生物多様性保全企画官）
尾崎 絵美 委員（環境省 大山隠岐国立公園管理事務所 所長）
原 耕資 委員（環境省 大山隠岐国立公園管理事務所 松江管理官事務所 国立公園管理官）

委員の交代等：

佐藤 仁志 委員（島根大学 非常勤講師）
山崎 徹 委員（(株)山陰合同銀行 代表取締役頭取）
中西 広則 委員（鳥取西部農業協同組合 代表理事組合長）
伊澤 勇人 委員（中海・宍道湖観光協会会議 会長）
渡部 和夫 委員（宍道湖漁業協同組合 代表理事組合長）

（承認）

議事

議事（１）斐伊川水系生態系ネットワーク全体構想について

（資料１：「斐伊川水系生態系ネットワーク全体構想について」の説明）

（質疑なし）

議事（２）活動状況等報告

（資料２－１：「活動状況等報告① 専門ワーキング報告および、水鳥プロジェクトの活動報告」の説明）

委員 宍道湖西岸で圃場整備が行われている。水鳥との共存に関連し、工夫する方法を検討されているのか。全国的な対応の事例と、宍道湖西岸の圃場整備の状況についてお伺いしたい。

委員 大型水鳥類の採食地は、農地に依存している割合が非常に高い。農地は不可欠である一方で、農地は農業者が経済活動をしている土地である。水鳥が農地を利用することにより、食害等の問題が懸念されるようになる。それらの課題を地域の人や農業者にばかり負担をかけると、全体の地域づくりは成功しない。問題に対して最小化できる努力をし、水鳥がいることを活かした付加価値を農産物に付けることにより、水鳥を受け入れることは農業にとってもプラスになるのだという流れをつくる、またはつくる努力をしていくことが重要である。

圃場整備の計画により、土地利用が変われば大型水鳥類の利用も変わってくる。水鳥がよく利用する場所に対し、被害が最小限となる土地利用の仕方を考えていく必要があると思う。鳥たちがどのように利用し、実際にどのような問題が生じ、どのようにすれば防げるのかという基礎調査や検証を実施しなければいけない。2年3作であれば、最低限2年通して地域で調査を実施した上で、それらを踏まえて具体案を考えていくことが重要である。

委員 宍道湖西岸の圃場整備は大型水鳥類にとって非常によくない方向に進むおそれがある。このため、これまで様々な対策を提言してきたが、結果としてほとんどの提言を実現できていない状態となっており、非常に残念に思っている。

世界的には生物多様性条約に日本は参画しており、その中で閣議決定に基づいて、それぞれの省庁が生物多様性について配慮するものを法律に落とし込んでいる。今後もより良い方向に導けるよう、意見を申し上げていきたいと思う。農林水産省でも今後も努力いただきたい。

事務所長 本協議会の場合は、これから何ができるのかという前向きな提言をする会としたいと思っている。

近代化農業はこれから目指すべき方向だと思うし、実際、圃場整備を入れていない地域では多くの休耕田が目立つ。それらの休耕田が多い地域について、環境省からはビオトープ整備に補助金を入れて進める、農林水産省からは、代償ミティゲーションを考える地域とするなど、活用法を考えていけると良いと思う。いくつもの制限や障害はあるだろうが、まずは発言することで実現することはあると思う。

座長 農林水産省もこれまでの方向性から大転換し、様々な地域特性に合った農業を進めているところのようである。例えば、有機栽培については大変野心的な数値目標を掲げており、そのような方向性を示さなければ、日本の農業は国際的に生きていけないという方向になっている。どのように現場との共生の調整が図れるのかがポイントとなり、この辺りの前向きなご意見を頂戴できることが非常に重要であると思う。

生物多様性という言葉は世の中になかなか定着せず、自分はその概念を主流化させていく取り組みを進めてきた。今後はネイチャー・ポジティブ、自然に軸足を置いた価値観、自然からものを考えるという発想を定着させることが、国全体の2030年目標となる。国の政策としては、そのような方向に着実にかじが切られていることを前提に、それぞれの地域特性や資源などをいかに経済価値化するかを議論していけると良いと思う。

(資料2-2:「活動状況等報告② 協議会委員等の活動状況報告」の説明)

雲南市副市長 雲南市では、7年連続でコウノトリの営巣、ひなが誕生した実績がある。今年は3羽誕生し無事に巣立ちを確認した。コウノトリは雲南市が誇る資源であるとして捉え、雲南市は「“幸せを運ぶコウノトリ”と共生するまちづくりビジョン」を作り、年次計画的なアクションプランを策定して取り組んでいる。着実に実績や成果がある一方、これは市民や地域の様々な関係者、そして客観的に周りから評価されるような中身をつくっていくことが、重要だと思っている。

また、総合計画の議論が今年度から始まり、その中でコウノトリを巡る資源、活用、課題を市民レベルでしっかり議論していくことも重要であると感じている。

雲南市は今年3月に雲南市コウノトリの保護及び共生に関する条例を作った。これは共生、保護に関わるものであるが、一方で地域経済の循環や活性化につなげていくことが重要と考えており、条例の全文の中に農産品などの高付加価値やイメージ向上を、恵みという言葉方で書いている。コウノトリを巡る取り組みを定着させるために、どのように具体的かつ着実に進めていくのか、考えていく必要がある。

雲南市は昨年6月に脱炭素宣言をした。こちらでも雲南市のまちづくりの大きな柱となる。これらと生物多様性との親和性を自分は感じており、宣言の中では地域経済の循環をうたっている。市民運動になるような手法で、定着していけるよう取り組んでいく。

今後、多くの自治体で観光が注目され、インバウンドが本格的に再開する。これまで自分たちが普通に思っていた、ありのままの自然や暮らし、文化が、外国の方から見た時に関心を示し、十分に評価されるものだという気付きが最近あった。観光振興の視点も考えていく必要がある。

そして、あらゆる施策の基本になるのは人材育成である。計画を掲げても、プレーヤーや人材がいないと物事は一向に進まない。様々な施策を進めていく上で、人材育成を図りながら進めていきたい。

出雲市長 出雲市は、昨年8月、トキの野生復帰を目指す里地に選定された。トキが出雲に舞い、定着するには市民の皆さまのご理解とご協力、また、機運の醸成が不可欠だと考えている。引き続きNPO法人いずも朱鷺21の皆さま方と密に連携し、共に取り組んでいきたいと思う。

出雲市では、トキを活かしたまちづくりに全市を挙げて取り組むため、庁内推進本部を設置した。自身を本部長とし、特別職および各部局長全員をメンバーとした体制で、各部署が横断的に取り組みを進めていく。併せて三つのワーキンググループを設置している。放鳥、野生復帰に向けた課題を整理し、具体的な施策をまとめたアクションプランを策定の上、年次的に放鳥に向かって取り組んでいく。

出雲市では、環境に配慮したまちづくりに対する啓発活動、機運醸成を図るため、トキの美しい羽の色を市のイメージカラーに指定し、視覚的に市内外へアピールすることを考えた。トキ色を通じて、トキが飛び交うまちは自然豊かで、様々な生物が共生し、環境に優しく人が住みやすいまちであることをしっかりと発信していきたい。

出雲市トキによるまちづくり推進協議会、出雲・雲南地域広域連携生態系ネットワーク推進協議会、本協議会と、放鳥を見据えた事業を円滑に進める上では、これらの組織が深く連携して取り組む必要がある。今後、皆さま方の力を借りながら、環境づくりや地域づくりを加速させていきたい。トキは子育ての季節が終わると、大河川沿いを採食地として利用すると聞いている。出

雲河川事務所においては、川の中においてもトキの生息環境を確保していただけるようお願いしたい。昨年の本協議会で、トキの本籍は出雲市だが、現住所は様々な所にあるという、会長の言葉が非常に印象に残っている。放鳥に向けて盤石の体制で臨むためにも、近隣の自治体の皆さま方とタッグと組みつつ、島根県のご支援とご協力、力強いバックアップをお願いしたい。

トキの野生復帰の実現は、斐伊川をはじめとする島根県の豊かな自然環境を実証するものだと考えている。委員の皆さまの力強いご支援とご協力をお願いしたい。事業を展開するに当たり、様々なご助言をいただいている日本生態系協会にも感謝し、ご報告としたい。

座長 現在、観光庁では高付加価値化が重要視されている。自然と深く出会うことによってデジタル社会のストレスを解消しながら、より創造的な自分に気が付き、それを事業に投影していく方向が世界的に求められる時代となっている。この地域はその潜在性が非常にあると考えている。競争と共生は宿命である。競争の過程の中で様々な軋轢が生じるが、必ずどこかで安定する。地域にはお金に代え難い自然資本財という財産があり、これを少し磨けば、たちまち実際の経済価値に投影されてくる。安定性をどのように確保するか、取り組みをどのように高付加価値とすることが非常に重要である。

日本の観光において、世界の人々が求める日本の姿は、自然といかに共に生きる努力をしているか、その文化的な有形物、無形物の両方にわたる価値に対して、感動を求めに来ている。自分の地域は田舎だから何もないとよく聞くが、実は何もない所に価値があることに気付いていただきたい。皆さま方の現場での苦労が、全国の参考になることをぜひ理解いただきたいと思います。

議事（３）斐伊川水系生態系ネットワーク形成に向けた取り組みの将来像について（素案）

（資料３：「斐伊川水系生態系ネットワーク形成に向けた取り組みの将来像（素案）」の説明）

委員 大変明確に広がりのある良い取り組みかと思う。トキも、コウノトリも広いエリアを利用する。巣塔の周りなどの狭い範囲に限らず、周辺の農地や採食の場所など、広い範囲の生息環境をつなげていくことが重要だと思う。

委員 米子水鳥公園はもともと造成した湿地であると思うが、地盤が徐々に下がり、水鳥がねぐらとして利用する環境が、悪化してきていると聞いている。これら実際の現状と対策についてお考えがあれば伺いたい。

委員 米子水鳥公園は、もともと中海の湖底の土を干拓の時にサンドアップして造った所。湖底の土はシルトという非常に細かいもので、例えば風が強く吹くと、湖底の砂が巻き上り、雨が降ると、巻き上がった砂がオーバーフローして流出してしまう。これにより、当初水鳥にとって良好な浅い水域環境であった地形が、少しずつ悪くなっている状況にある。

可能な限り近くの工事現場から砂をもらうなど進めているが、すずめの涙にもならないのが現状である。例えば大きな国の事業で砂を置く所がない時は、米子水鳥公園に入れていただきたいと思います。

事務局 今後のワーキングを通じて、協力できるところは進めていきたいと考えている。

事務所長 おそらく大橋川の改修の中で中ノ島を掘削する必要があるため、米子水鳥公園の面積同等の量の土砂が掘り出される可能性があるため、タイミングと質が良ければ提供可能ではないかと思う。ただ、砂を池に均すための予算については、鳥取県などと調整いただければと思う。こちらにとっては残土でしかないものが、他では財産となることもある。このような場を通じて連携していきたいと思う。

座長 オフサイトの代償ミティゲーションという、その場で解決できない課題を別の場所で代替処置を行い解決するという方法は欧州で盛んに行われている。今のお話はまさに、そのようなモデルになるのではないかという気がしている。

委員 斐伊川河口周辺は雨が降った時に、強制排水でポンプアップして宍道湖に出さなければいけないほど、地盤の低い所。

日本の魚の多くは回遊性であるため、海と川を行き来しなければならない。そのような魚たちは、斐伊川や新建川など、ある程度大きな川から水路を伝って入っていくしかない。国土交通省は斐伊川本川を整備するが、その周辺の小さな川や、農政局が整備する小さな農業用水路など、そのような所の生き物の豊かさや水鳥の多様性を語っていく上で重要かと思う。

宍道湖の名物のフナは純淡水魚である。宍道湖のフナは汽水で育つので、冬に甘みがあっておいしい。このフナは、一部を除く多くは宍道湖から川の中に入り、産卵をして大きくなる。

コウノトリなどが食べられるほど、魚が豊富でなければ、魚取りはできない。魚と鳥が互いに育ち、漁業者も多く魚が取れるような自然環境になれば良いと思う。

委員 鳥取県西部と安来市、雲南市で大型風力発電の建設が予定されていることを懸念している。特に、大出日山周辺が心配である。この懸念や影響について調査し、共生の問題と併せて検討していただきたい。

雲南市副市長 雲南市と安来市との境にある大出日山では、大型風力発電の計画が出ている。雲南市では脱炭素宣言をしており、再生可能エネルギーを生み出すことには非常に意義がある。

一方で地域住民の方への様々な影響が、景観も含めて生じると思われ、これについては慎重にしっかりと検討しなければならない。これは民間事業であり、国や県に権限がある中で、市としていずれ意見を述べる機会はあると思う。また、環境審議会という条例設置に基づく審議会には専門の方がおられる。市民の声を聞き、情報収集を行いながら、きちんと議論をしていきたいと思う。雲南市としては非常に慎重な立場で現在、推移を見守っている状況である。

座長 これからトキとコウノトリの二大主役がぶつかり合う事態が生まれてくるのではないかと思う。すみ分けについての知見を伺いたい。特に採食地の場合は、コウノトリとトキは脚の長さやくちばしの違いがあるため、水深の問題ですみ分けが利くと思うが、両方に合わせた仕様をどのように機能させるかは非常に大きな問題点である。

委員 結論から言えば、コウノトリとトキの生息環境は大きく重なるのではないかと思う。登米市の場合、これまでコウノトリが長期滞在している所は川沿いの河川敷、山間部から本流につながる支川の接続部分の河川、そこにつながる水田などが使われている。将来的にはトキもそのような環境を利用することを見据えて、環境をきちんと残していく必要がある。

厳密に言えば、トキとコウノトリでは脚の長さが違うが、湿地は水際が浅く、中央付近は深くなるなど、連続した様々な環境があるので、基本的にはコウノトリが利用できる所はトキも利用できると思う。そこを区別するよりも重要なのは、鳥たちに選ばれた場所には理由があるということである。なぜそこを好んでいるか条件を解明し、要素をはっきりとさせ、同様な要素を持っている所を残し、足りなければ再生する。そのような方針で進めていけば、良好な環境が広げられると思う。

議事（４）その他、情報提供

農林水産省

（資料４－１：「みどりの食料システム戦略 パンフレット」の説明）

環境省

（資料４－２：「第１回トキと共生する里地づくりネットワーク協議会の概要」の説明）

（質疑なし）

閉会

事務局

本日の資料は、出雲河川事務所のウェブサイトにて公表させていただく。また、議事録についても公表させていただく予定である。

以上